

'92全日本ラリー選手権シリーズ第3戦  
**'92BLACK SPRING RALLY**

■4月18～19日／大分270km

撮影●清木博志／報告●村井 豊



2位黒崎正博、3位松本誠も桜井の走りにお手上げ!!

今回がデビュー戦だったVIVIDがAクラスを制した。高羽正文／星野元は全日本戦初優勝に大喜び。



# 速報!!



## 桜井が逆転で今季早くも2勝目! AクラスはVIVIOがデビューウイン

「最後まで気を入って全開で攻めた」という桜井幸雄が1スタの3枠のビハインドを逆転し今季2回目の100ポイントをゲット。

全日本ラリー選手権シリーズは第3戦「Aクラスプリングラリー」を迎えて、いよいよダートシリーズに突入。開幕1戦以上にエキサイティングな戦いが展開された。この開幕のAクラスラリーは、長いトランスポートとオートボリスのSS5で構成された第1ステージを設定していたが、今回のラリーではオートボリスステージを廃止し、

「確実に自分たちのエリアのなかでラリーを主催する」(徳丸三郎会長)

というように、結核性、選手さという面を捨て、堅実なラリーを主催する方向に切り替えた。このため、ラリーは午後7時スタート、午前4時ゴールというナイトステージのみのスケジュールになった。さらに、ラリー区間の暴走を抑えるために、CP途中にブライインドチエックを置いて、通過時間をチェックするシステムを導入した。主催者の意図は理解できるものの、ブライインドチエックの是非、方法についてはさまざまな問題も内包されている。開催には精力が出せる状態ではないので、別の機会に詳しく報告したい。

こうして、ラリーステージ(SS)は26・9区間は、ある意味では昔ながらのスタイルに戻ったAクラスラリー、シリーズ争いという面では、非常に重要な意味を持っていた。このうち、シリーズは残すところ3戦。このうちASUKA、モントレー、MCSは毎年の傾向をみると、特定選手による優勝争いの展開が続いている。従ってACC、ひんつき、AGMSSCの3戦が、チャンプをねらう選手に絞っては、より重要になる。また、ダートイベント種別となる今回のラリー、各マシンの競争は比入というのも見逃せない要素だ。

ラリーはダート2、舗装1SSを含む第1ステージ、ダート2、ダートも舗装、舗装各1SSを含む第2ステージで構成された。まず、1区間までによりCPが置かれ、最少でクリアしたのは前嶋光男/岡本雄二コンビ。各クルマともう点程度の差でつけたが、新車



ACRを優勝とする高橋は今回も快調にラリーを進め2位に、1ステをトップで上がり、全日本戦初勝利に手をかけたが――。



後半追い上げて3位の松本。表彰式ではマイクを独占、マコト郎を驚かせた。



シタラスの上段3クルーがカップで「祝杯」

でマシンを製作、ようやく間に合った高田は  
音が2点をくらい、大橋浩夫、岡崎憲一、藤  
田哲也が20台の減点で出遅れている、こう  
してラリーは足慣らしのラリー区間を終えて、  
多手を覚む本格的な戦いの場へと進んでいっ  
た。

2・11日の多手を制したのは山内伸徳と  
石田正史だ、しかし、続く3・5まで両者にト  
ラブルが発生してしまふ、石田は、  
「いけたと思っただけで油が足り込んでいた、  
オーバースピードだったかな」(笑)、ベスト  
で表彰が入りすぎた。

とコースアウト、山内は、  
「例でもぎれたんだかわからないんだけど、  
ロワーアームがもぎれた、たぶん、マシンの  
セッティングも含めてタイヤのグリップがす  
ごくよかつたんだ、だから、ブレーキングと  
ギヤップ(ワダチではない)のタイミングが  
合ったときにグリップが高くて、入力が大き  
かつたんだろう」

と5・5区間の区間はまともに走れず、1ステ  
はゴールしたものの、サービスでリタイヤ  
旗を提出した、山内は今シーズン3戦して完  
走がまだない、ただ、石田正史とともにマシ  
ンのボクシングは十分に感じ取ったようで、  
残る3戦の巻き返しを期待できやうだ、彼ら  
がトラブルを起こした5・5は、この数年こ  
のラリーを優勝としている高橋正博がベスト  
であり、ラリー区間も含めてラリーリーダ  
ーで最後の優勝さるに決った。

ところが、5・5へ向かうラリー区間で何  
クルーかにドラマが待っていた、前橋が  
ミスコースから4分以上の大量減点をくらひ、  
島田、大嶋、岡崎、大野誠介、藤原典洋らら  
が多数の減点を受けてしまった、さらに前橋  
の優勝者西尾雄太郎が致命的な1分以上の減  
点をつくってしまったのだ、西尾はサービスで  
リタイヤ、こうして序盤で有力選手が優勝戦  
線から脱落していった。



スタート会場は城島後楽園に置かれた。



Aクラス2位は守谷夫妻。久しぶりに上位に食い込んだ。

チームイースズ入りして3戦目で2位をゲットした新井敏弘。光気のよさはナンバー1だノ



Aクラス上位入賞クルー。



Bクラス上位入賞クルー。



地元九州でスヤに速さを見せた吉武正博が久しぶりの勝利をつかんだ。「長いことやっていれば必ずいいことがある」とニココリ。



「長いことやっていれば必ずいいことがある」とニココリ。





6台に増えたジェミニ勢

## 「ゴト」は桜井の年をライバルに 印象づけたたっ2ステ終盤の逆転勝利

1ステ最終のSS3を制したのは1ステの青嶋。山口が1秒差の2番手だ。高崎、櫻井半差が1秒差で続き、松本、藤原、中村海治がさらに1秒差で迫る展開となって、サービスポイントの成島後園園へ戻ってきた。1ステを終了してオーダ

1は、高崎がリーダーを守り、3秒差に前半の山口の「ザマミろ」発言から燃えている(付)。桜井、板井からも抄聞いて仲間、2秒差で山口、以下中村、景山陽彦、加勢裕二、松本らがダンゴ。少し離れて田口盛一郎、竹

下使博がベスト10にくい込んでいた。トップの高崎は、「緊張SSでは減ったタイヤで勝負に出たけど、砂の出ているりやすい路面に乗ってスピンしそうになり、かなりロスしている(それでも2秒差)」と悔しがりますが、このときに高崎には、それ以上の大きなトラブルが発生していた。「一方迫いける桜井は、「SSがまだ長距離残ってる

し、ナビ区間もあるから十分(進め)可能。マシンのほうは一昨年からさらに進化していて、コーナーリング性能は上がっている。1ステは抑えて2ステが勝負。もう少し踏む」とノックしてきている。事実上、優勝争いはこのまに絞られた感がある。前半優勝の山口はオーバードライブに苦しんでいるし、仲間もショックに不安を抱えている。

参戦している。基調宣言なBクラスはまずシビタの大捷と「Fは軽さがメチャクチャにあまり感じなくて不安」と話していた板井がベストで戦いの幕を開け、それを受けて板、新井のイース勢がSS3のベストで切り返すという絶好の展開。

しかしSS1、2とも数秒差につけた吉武が、SS3で一気にポイントをかけた。ただ一人1分20秒台に入れ、2位板山、安波を5秒引き離すベストで一気にトップに浮上した。19秒差2位は板と地元の新藤広。全日

本初優勝の柳の健闘が光る。続いて10秒開いて板田原。そして新井、小西と続く。Aは板田がいきなり電気系のトラブルでタイヤ、岡本が1ステで脱落し、西園がブアもどき、鳥井が迫る展開だが、その差は31秒、

B/Aクラスは、Bクラスが不利なスノワラリを終えて、いよいよチームイースが前線に復帰。藤原彦、小西輝男、新井健弘の3選手の前走りが注目された。そして地元の前原真、シビニの佐野正典、広島の河本常男を加えて、ジェミニが6台と最多勢力になっている。

B/Aクラスは、Bクラスが不利なスノワラリを終えて、いよいよチームイースが前線に復帰。藤原彦、小西輝男、新井健弘の3選手の前走りが注目された。そして地元の前原真、シビニの佐野正典、広島の河本常男を加えて、ジェミニが6台と最多勢力になっている。

Dだ。北海道の三上弘光も新車1タージョー4WDに変更している。マータR勢では、地元で3年ぶりの優勝に気合を入れる吉武正博をはじめ、若槻平治郎、観山太郎のNRS勢、地元の岡田孝一、安波広通、三若和義ら。シビタ勢は大橋千明が白ベイス、茅根秀紀が黒ベイスの三菱オスラムカラーになった。

Aクラスは、先行する板田蓮幸と、雪辱に燃える西園健次と岡本忠雄、守屋教昭に加え、今回から鳥羽正文がVIVIDIOで

第2ステージに入る大、高崎のマシントラブルが表面化してくる。実は1ステ途中から3連

が我ってしまったのだ。SS4は山口が意地を見せるが相変わらずオーバードライブに苦しめ、



C板井とA鳥羽が「調音ウイン」

### 桜井、ハターンで大逆転!

